

乳がんの転移形式(リンパ行性転移と血行性転移)

乳がんの転移は大きくリンパ行性転移と血行性転移に分けられます。リンパ行性転移はリンパ管浸潤から腋窩や鎖骨上などの領域リンパ節に転移を来す経路で、血行性転移は血管浸潤から骨、肺、肝、脳など遠隔臓器へ転移を来す経路です。周術期のスクリーニング検査で転移がないと診断された乳がん患者の予後が補助療法によって改善することから、乳がんは診断した時点である程度の確率で画像検査では同定できない微少転移が存在すると考えられます。転移に対するスクリーニング検査の手法等については、「乳がんの診断について」の項目を参照してください。

乳がんの転移には乳がんが発症してから診断されるまでの時間経過すなわち病期と、発症した乳がんそのものが転移を起こしやすいかどうかという分子生物学的特徴、および宿主条件が関与していると思われます。つまり腫瘍径の増大や領域リンパ節転移が高度であるほど、生物学的悪性度が高くなるほど(一般には)遠隔転移の頻度が高くなります。

骨髄微少転移や circulating tumor cell と予後の関係、乳がん幹細胞などの新しい概念の登場によって乳がんの転移の本質を理解するための新たな突破口が見いだされつつあります。